

書名：草の花

著者：福永武彦

出版社：新潮社

出版年月：1972年3月

総ページ数：302ページ



推薦者

田中雄三

鳴門教育大学長

～青春の一冊～

現在、私の家には本棚はない。あちらこちらの部屋に無造作に雑多な本が積み重ねられている。「美は乱調にあり」というのは言い訳である。この中から一冊を取り出して紹介するのは無理なので、心の引き出しから取り出したいと思う。

著者の福永武彦（1918～1979）は仏文学を専門とし、長らく学習院大学で教鞭を執っていた。「草の花」は彼の代表作である。私は17歳の時にこの作品に出会い、以後の恋愛観や人生観に明確な輪郭を与えられた。一度読んだ本を、二度読み、三度読みする質ではないが、この本だけは例外であった。小説は、主人公の年齢によって「第一の手帳（18歳）」と「第二の手帳（24歳）」に分かれているが、プロローグとして「冬」、エピローグとして「春」が配置され、額縁のような役割を果たしている。まがうかたなき恋愛小説であるが、読後、身を切られるような寂寥感と圧倒的な孤独感を味わうことになる。ここで内容を紹介するのは野暮と思うので、小説のエピグラフのみ以下に記述する。

<人はみな草のごとく、その光栄はみな草の花の如し（ペテロ前書、第1章、24）>

私は無神論者だが、作者が冒頭に引用しているこの聖書の一句は、深く心に残っている。そして、無知ではあったが、心が滾るような青年時代が、確かに私にもあったことを夢幻のごとく思い出す。青春の孤独と虚無を鋭く切り取り、サウダージな感情が横溢している一冊、落涙を禁じえない。

「草の花」を手に取り、ページをめくり、その感動を私に伝えてくれる読者がいたら、これ以上の喜びはない。作品を通して若い諸君と出会うことを楽しみにしている。

余談だが、今年、日本芸術院会員となった作家池澤夏樹氏（1988年芥川賞受賞）は、福永武彦のご子息である。

